

一本の煙草に燐寸の火を擦るに心聊か和む。更に烟ふかしつゝ、その一縷の頻りに搖けるを見るも果敢なき慰藉なり。

○電燈の明り薄く濁りて、戶外風ある景色なり。夕刊を配り歩く脚夫の足の冷たさを切りに想ふ。

○年の市、十二月の半より開き初む「市ヤ負けた」の賣聲、年々に寂びれ行く。神田の明神の坂の兩側に羽子板賣る店並びて、押繪細工の派手やかなるが燭光に映じて、仰ぎ見る娘子供の黒き瞳に輝ける美觀は、今電車往きかへる荒まじさに掻き消されて、亦見るべからず。神社の境内に僅かに其の名残りを留むるも哀れなり。秋祭りに花車の高きを誇りとせしも電線の爲めに遮られ、明神の市の賑ひは電車に阻まる。神田てふ著しき印象は文化に侵蝕せられぬ。

○街の家々の前に松立つる人々の様を見るは、歳暮らしき感じを起さしむるものなり。生活に追はれて月の末に晦日あるを恐れ來れる者は、愕然としてこゝ、

に年の終りの近づけるを知る。年内餘す所幾日、願れば心の寒きを覺ゆ。人は今病める兒の藥取りに行く途なり。

○歳暮の街に滿つる人々の心の慌だしさは、他の季節に又と見出し難き所なり。大賣出の店先きに、廣目屋の樂隊鳴り、三越の自動車、お誂への春著を載せて誰々の邸宅に於行く。路草せる小僧も、さすがに忙中の閑をもとめ難く、そゝくさとして小刻みに行く。人力車、自轉車、箱車、右往左往に馳せ違ふ。憐れなる人生の戰場なり。

○冬至に近くして、晷益々短かし。明け遅くして、暮れ早く、永き日の陽なほ高き頃に、燈火既に點せられて、夜業せる職工の青白き顔、露はに明け放ちたる工場の所狭く集へり。殊に新年の刷物に一時一分を争へる印刷所のはためきの中に、黒く煤けて目のみ光れる活字拾ひの、二階の窓よりふと顔差出して、暮れたる町の燈影を眺むる眼の、どんよりせる中に、何か求むる所ありけなる

哀れさ。

(十二)

○歳暮るゝに近くして、空青う晴れ續く、青けれど澄まず、底に灰色の濁れるを混へたらむが如し。風なく麗らかなれど、裡にもの、終りの寂しみを含む。諦視すれば、身内の疲れを覺ゆ。働らく丈働らきて、尙ほ爲すべき事は残り。心に不安を懷きて、霎時此の青き晴れ空に對するに、うつら／＼と双の臉の塞がるを覺えず、今日は冬に稀なる日和なり。

○一とせの暮、美濃の山を攀ちて、巖角に福壽草の花の聚まり咲けるを見き。月並視來りし此の花の愛すべき趣を眺めて、摘みし一輪の黄なるを賞でたりしを記憶す。今はしなく其の記憶を呼んで、寒かりし山越えの霜に黄なる匂ひを點せし此の花の趣あるを想ふ。時と處とに依りて花の生命に死活あり。

○場末の街も松飾して新年の装ひ成れば、賣出し福引と客を呼ぶ用意をさ／＼怠りなし。暮の暇賜はりて所在なき小役人などの、妻をつれ子を伴れて、日中よりぶら／＼せるもの相踵ぐは、此邊りの町の特殊の光景なり。さん／＼歩き歸るさは、母に引かる、女の子の手に羽子板あり、寝たる男の兒を抱ける父の背に金太郎の凧、はた／＼と動けり。正月は何時にても來よ、太平の象なるかな。

○郊外の歳暮は靜かなるものなり。殆んど年の來るを知らざるもの、如く、縁の日向、炬燵の中、人はたゞ暖かきに就く。霜枯れし籬落、時に冬椿の白きを見、寒紅梅の紅なるを睹る、鳥聲閑なり。霜柱くづして訪ふ人稀れに、若うして籠り居の徒然なるが多し。植木屋が得意先きに歳暮に廻るとて、梅の盆栽など載せたる車を挽き行く音、時にゆるやかに聞ゆ。

○餅搗きは歳暮の特殊の景物なり。町家の若者の搗くは元氣よく賑は、しきも

のなれど、郊外の林の中の家などにて搗くは、寂しく陰氣なり。大久保に村居せし頃、夜更けて此の餅搗の音を聞き、心うち沈みたりき。搗きながら歌ふ節の陰に籠りて、少し隔たりたればにや、皺枯れしやうなる聲の、絶えなく聞ゆ。木枯し吹き絶えて、林に聲なき夜なりき。

○湯につかりて遠く市のどよみを聴き、誰彼の生の苦闘を想ふに、うら安き身の早く老ゆるが如き哀しみを生ず。落葉の音一しきり、遅れて来る夕刊の鈴の音、奈何なる新聲をか齎らせる。さても、郊外の歳暮の夜の静かなる哉。

○年こゝに盡くる大晦日の夜の星光を仰ぎ、しみじみとせる哀感を味はふ間もなく、百八の鐘の聲は起れり。一杵又一杵、ふる年を葬る音の次第に極まり行けば夜はほのくくと明く。

○二階の藤椅子に依りて、煙草吹かしつゝ、今年の初空を望む。蒼天拭ふが如くに晴れて、渡り行く日輪の歩みいと快けなり。屠蘇香ひ、凧うなり羽子飛ぶ、

平凡なる正月の幕開かざる此の霎時の間こそ、却つて新なる年の平和と愉悅とを味はふべけれ。

○元旦の朝早く乗合なき初電車に乗りて濠端を一周し、深き緑の松の梢に、初日の影の漂へるを見れば、静寧なる年の初めの感じを覺ゆべし。此の景色、見やうに依りては、月並の臭味あるべきも、ゆたかに静かなる新年の象は、之に見得らるべし。

○二日の初荷は江戸時代の市街美を感じせしむ。美装せられし馬の初嘶きのいかに八百八街に響きしかを想見せしむ。六日の夕べに門松取られたる寂しさは、明くる七草の薺を叩く俎板の音に搔き消されしも、今は此の音、家毎の厨に聞かずなりぬ。

○初春の棚引く薄霞は今の一月に見るべくもあらず、五日より寒に入りて、水道の鐵管凍りつく朝多し。無爲の富家の子争うて初獵に出づ。罪なき雉子、山

鳥、鶉、鶉などの群、彼等の兇手に落つ。

○寒詣りの白衣を夜の街に見るは、一種の哀愁を惹く。鳴らし行く鈴の音の何ぞ滞れるや。

○初芝居の重なるは、月の半より開かる、悠々として東風に鳴れる初織の音に早く春色の動くを見る。

兒を愛する歌

兒が世界

ぶらんこに乗りて遊べる兒がこゝろ小きき世界をたのしむごとし
兒の世界大人は知らず、ぶらんこにゆらるゝ如き心になりたし
たのしめるあの顔のやうな心にてせめてひと時あらばとおもふ
しづけさを欲する心兒は知らず、椿のかけのわれおどしけり
兒をもつと愛さねばならずと思ひけり若草の原を獨り歩みつゝ、

かへればいつも袂にすがる兒をおもひおもちや屋に寄る春の夕ぐれ
小さな凭り椅子に兒はかけてるぬ仰向きて白き蝶を見てあり

わが病める夜と兒

わが咳によく寝ねたりし兒が目ざめ泣きもせずわれを見てありにけり
兒が頭撫でつゝ、われのいふことの遺言の如く何ぞさびしき
われ死なば兒は何とせむ、戸外には雪がふるふる春の夜の雪
われ死なば父のなき兒と嘲まれむ、そのうしろかけ今よりさびしも

亂れたる心の眼のすみくれば兒がほ見の泣き顔の見ゆ

わが身邊の兒

兒が傍であそんでをれど苦にならず、わが尊き仕事の間

露西亞の熊のおもちやを眞黒に塗つて見せたり仕事と思ふらし

室内は電車自動車往きかひて兒が賑はしき世界なりけり

三角をいくつもいくつも書いて居りふと見ておもふ寂しき暗示

書棚よりわが著書をのみ選り來り讀むまねをして笑ひけるかな

いぢめられ泣いてをらずやなどおもひ戶外のけはひさびしまれけり

年上の友らわが兒を立て、るぬ青き楓の陰する小徑

息こめて喇叭を吹ける健康のわが兒を愛す六月の朝

門前の廣場のあつき炎天に眞黒になりて鞠投げあそぶ

わが著書に徒書きして兒は居たり、誰も見てるぬもの、如くに

兒が力かるがるとわが著書を持ちなけうつに何でもなきごとし

三四冊かさなればわが著書の重み持ち上ぐる兒は倒れけるかな

書棚のガラスに顔の輪廓を兒はそのまゝに描く白鉛筆

埃だらけの革囊を出せば旅にゆくこと、わが兒はえも離れざり

啼きごゑをうしろに遠くゆく旅のさびしさ思ふ兒を傍に

しみじみと小さきものを慈しむ心起りぬ抱き上げれば

旅なる兒

兒は遠し、旅人らしく日焼けして麥藁帽の赤くなりぬらむ

父よともえいはで何かさがしるる兒がいわけなき眼に浮ぶかな

歸りくる時は田舎の訛りなど片言のなかにまじるなるべし

秋の晴れ母に抱かれて汽車の窓瀬戸内海も知らずゆくらむ

汽車著きてはじめて母の故郷の地をふむことも知らずやあるらむ

ザンボアの實れる母のふるさとへ兒はまるまると肥えて行きたり
繪葉書に母が代筆のおとづれの來ぬ日はさびし、ひとりなるかも

病める兒

熱いでし赤ら兒が顔うちまもり「強し」といへばしひて笑へる

新しき玩具おもちゃの電車自動車を走らすれどもよろこばず兒は

病める兒が大ごゑあけてうたへるは眞夜中なりき驚かさされぬ

朝しづかにぶらんこの綱がゆれるたり兒は病みたれば久しく乗らず

誤解して叱りしこともかにかくにおもはれてならず兒が寢顔見て

この兒いとし、父のうれへを知るごとく元氣を出して走りまはれる

兒が病めばわが世は暗くさびしくてもくの食へど味あじもあらざりにけり

書齋も客間もあらず友つれて横行せりし兒は病めるかも

聲荒く叱りて、ぢつと見入りたる兒が腫めにあへばうしろめたしも

友だちが迎ひにければ寢て居れど大ごゑだ出して應こたへけるかな

この父のさびしき性をさびしめる如き眼つきを時にするかも

病める兒とハモニカ

病める兒はハモニカ吹いてるたりしがふともに怖ぢ臆を閉めにき

病める兒が頬を紅ばませ吹く見ればハモニカの音のあはれなるかな

コスモスはなよらそよけり兒が吹けるハモニカの音の澄みて觸るれば

ハモニカを吹きねといへば臥たる子はすなほにも身を起すなりけり

兒が誕生日

秋晴れたり、けふのよき日を謳ふべく兒が名の如く空の廣きかも

三たびめの誕生日なりおとなしうせよやといへば黙りけり兒は

寫眞屋へゆくなりといへば白き靴ふみしむるさへ力あるかな

新調の洋服を着て秋晴れに外出することの汝れも嬉しきや

空に向ひ大口開いて呼吸すれば兒も同じやうに呼吸したりけり

何を措いても兒が健康といふことの喜ばしきかな青空のもと

歐洲に大戰亂の起れるを知れりや汝も男子の三歳の秋

兒は三歳の秋ぞら高き誇りをば小手あけて歌を謳ふなりけり

いくさごとする兒の群れにうちまじりわが兒も旗を持ちてゐるかな

兒が持てる萬燈に火を入れてやれば走り出せる秋祭りかな

兒が頬のほひ

兒が頬のほひ西洋菓子のやう浴みのあとの春の夜の淡し

宵の春おもちやの象の鼻の鈴引いてぞ遊ぶおとなしき兒と

兒はあはれ玩具のごとし「廻れ廻れ」といへば廻りぬさびしくなれり

朱樂の香したゝるギヤマン皿の中、のぞける稚兒が顔のまるみかな

兒がもろ手にあまる朱樂を持たすれば黙つて見てあり眞晝の縁側

福壽草の前

福壽草のまへに小さき顔ならべ兒はかたことをいひあへりけり

兒が妹を見やる慈愛の笑みがほの小さきながらと、のひにけり

兒に紙鸞をあぐるすべしらず、一月の青空わたる風を黙し見る

兒をふたり膝にならべていたいたけの娘のえりに涙してけり

吸口をくはへてねむる兒が額に秋の夜白くふくるなりけり

十三夜さびしき影をつくりけり寝ねしわが兒を抱きゆく路

兒が啼けばおきいで、牛乳をあた、むる春の夜さむく雲がふれり

雪見ればおどろきてわが袖による兒が三歳の春のあけほの

女の兒

櫻の實口にふくみておとなしくすわりてありぬ、わがかたはらに

ふとそばにわが顔を見てるたる子の小さき瞳に會ひにけるかも

かしこまることを覺えて小さなる近侍は赤き衣著けてるぬ

何がなし俊子がつくりしあねさまのお染に似つと思ひけるかな

抱けばいつか寝入りたる子の頬の上にとまらむとする蚊の一つあはれ

「おんとんとん」かく呼ぶことを知りそめて父に能辯の子となりけり

合歡の花咲ければ父に抱かれてそのしづかなる花かけにゆく

父に似る女の子はも幸ありときくからにやすき親ごゝろかな

父のみの子の如くにもしづかなるさびしき子よと慈しむかな

金魚のごとく小さき女の兒、春のまひるをしきりに啼けり

女の兒いだきて晝の金魚の赤きうろこに見入るなりけり

別後哀情

椿さく島

春さむし八丈ヶ島に君ありと人づてにきくもたのまれにけり

春ちかし椿油つばきあぶらにてる黒髪くろがみをときつ、みやこおもふなるらむ

椿さく島なれば花ときじくに紅あかき波あけむ海にうつりて

はればれせし顔して椿のかけに朝郵あさゆうびんせん便船を待つらむ君よ

つきつめし女ご、ろのひとすぢに八丈へ来て遠く哀かなしまむ

春近みみやこにすらむ手毬てまりうた唄、島の少女がうたひけるかも

かよわなるをみなごゆるに島人しまびとは老幼らうせうこぞり愛かなしがらむ

その人はみめうるはしき京女きやうなんな、島人の眼はあつまりにけり

いつしかに椿の花の化身けしんよと島びとは噂しあへりけり

島廳たうちやうのまへをうなだれ行く君のすがたおもほゆ春の夕ぐれ

路ばたに水波みの瓊かみさ、けくる島少女らを見てあらむ君

水潜き出でし女の春なればぬれしふたのの紅きも艶めく

椿林いでたる君がばつとさす白バラソルも人目あつめむ

こゝに來ていよ、生命の愛つべきを知れりといふに涙くだりぬ

君こ、ちすぐれざる日は鳥少女砂文字かきてなぐさむといふ

鳥の子に読み書きをしへ歌教へ永き日あかず君はあるらむ

春の鳥啼けばあづまの空遠くおもひをよせてさしぐむらしも

潮の音も耳になれては濃藍の海見ざる日のさみしかるらむ

冬しらぬ鳥に來りてのんびりと生きゆくことののどけからまし

ふくよかに肉づきし頬の手ざはりの汗ばめるらむ春日照れ、ば

南風つばきの花をちらす磯、舟あらふ海女の老いしさびしさ

こんもりとしける椿に春の陽のかければ砂のさびしき夕かけ

春の月てれる夜潮にうかび來る海月もしたしきものと見るらむ

庭地まで白砂がつゞきいちめん椿のあかき家居戀しも

七日目に來る消息が二度までも來らず春のなやみとなりけり

歌もよまず日記もしるさずのんびりと鳥びとの中に今日もありきと

鳥の日は昨日も今日もはた明日ものどかに君にめぐるなるらむ

白魚の羹

三本木やなぎを前の宿のさま見ゆれ驚きけるこゝろに

柳青き川原に雨のそほふれり、軽くつかれてめざめにしかな

や、重く赤むまぶたのうつとりと濡る、柳を見てありぬ君

この朝のしづけさに二人かくてゐることの何がなしとがめられつも

清水より圓山へ行く雨のあとのほかほか輕き暖かさかな

息切れのすれば築土の夕ざくらあかるきかけに君のいこへる

圓山のさくらに京の人々のつどへれど春のものしづかなる

そよ風の如く耳に来る京なまりベンチに君と憩ひてあれば

ほのじろき音にうぐひすの一二羽の啼く圓山の春の夕ぐれ

松ばやしもやある上に春の星てるかはたれを瓢亭に入る

明日は遠くわかれてかへりいなむ身か、あぢきなく吸ふ白魚の羹

廢園の月夜

廢園のおほろ夜に去年のこのごろのさびしき夢をひとりたづぬる

草ふかう水づきわたる廢園の月夜の色をよろこびあへりし

月の夜の散歩にいつも相黙し入りし廢園に夏ふかみけり

その女月の光りに消ぬること草むらに入りてかへらずなれり

夏ふかく男はおもひ哀しめり、廢園の夜の露にぬれつ、

そのころの月夜をしのび廢園の入口にすればどつと蟲啼く

「月やあらぬ」ふとくちすさむわが聲の草の夜露にしみゆけるかも

わびしくも北野あたりに住めりとかやるにやられず消息は書けれど

あかしやの香

秋は来ぬ、生きがひもなき生活をのがれて遠く遊ばむと思ふ

あかしやの並木の月夜いづくにか残れる花の香がたゞよへり

逢ひに來しその人とこの水ばたのあかしやの夜にかたらへるかな

むかしのまゝの若さの中にあかしやの秋の葉のごと面やつれせり

手をとらむといへばいなめる横顔に夜のあかしやの秋の葉がちる

いきせきと來ていきせきと歸りゆく肩のほとりにあかしやがちる

そのかみの金の小時計いくたびか月の光りに見むとしたりし

はるばると逢ひに來れどなぐさまず、また秋風に旅より旅へ

浪華津の月白き夜に一杯の酒をふくめば胸のくるしき

宇治川を伏見へ下る秋の夜の舟にほたるの迷ひ來にけり

螢、螢はたるのごときはかなさにこの秋の夜を生きわぶるらむ

八月の京

蒸すごときあつさの中のいづくにか呼吸して汝れはこの京にあらむ

日盛りの旅人の眸のおとろへに加茂川の洲は青く燃えをり

訪ふはやすし訪はずかへれるさびしさの青き山河を暗くするかな

そゝくさと来てそゝくさと京を去る夜ぞらに月の缺けたるがあり

鐘鳴るや三千院のすみわたるあかつきの氣に涙おちぬれ

秋の鳥高啼きてまたしづまれり、三千院の溪みづのおと

すべてよりのがれて秋を死にもせず尼となれるは苦しがるらむ

大原や夕つゆのしろき道芝にたゝすみて誰れを待つやらむ、尼よ

袖をおほふ尼がけはひに過ぎゆける大原の里の夕かぜの中

戸をおして出でくる尼の横顔の夕日のなかに青白く見ゆ

この春のくれにつゝじを折りし里、人は住まざるなりけるかな

君すまます

その角を曲れば見ゆる木蓮の白く咲く家に君すまますけり

裏通り春しめやかに戸にいで、さびしくわれを待つ君なりし

咲き切りて木蓮の花くづれ落ちくづれ落つるをひとり哀しむ

くだけちる木蓮の音のさびしやな、地上に午後の陽が射しにけり

つと花の梢に薄き陽が照りぬ、くつきりと青空があらはれにけれ

うるみなき眼の大きな最近の彼れの寫真を見るはいたまし

ふるさとの川原の蓬陽に青み泣き腫れし眼にうすら沁むらむ

蓬摘めばほそれる指の爪に染むさ青のいろになみだうかべむ

春の雨ふりてまぶたの合はぬ夜が重なればいのちほそりゆくらむ

旅にしてさくら林のうす白き夜明けぬ前に死なむといひしを

川千鳥しきりに啼けば春の夜をいもねず君も泣きたりしかな

沈丁花旅館のうらの夕やみに匂へば君のかほよせてけり

水邊草舎

鮎を焼く臭ひ、まづしき厨よりすなり川原に夕日かければ

かへり來て東京の夏のあつさなど話す川原の夕月の家

秋早く川原のす、き穂を高めかくされにけりわれらの家は

蚊帳ごしに見れば汝れはも石白き川原にいで、口そ、ぎをり

あちらむき白きうなじを見せてをり多摩川石をわたる朝風

武蔵野の秋風白しいたいけの白粉けなき汝がえりを吹く

この家に秋の末までこもりるむ川波白く世をへだつれば

夕月にちらちら光る瀬が見ゆれ、ふるさとの母を汝れはおもはむ

鮎すしをつくと蓼の葉を摘める血色のよき汝が朝の顔

宇治の夜

宇治川に濃き霧のせし夜なりき、ひそかに都落ちて來にしは

ほとほと料亭の門を叩きつ、濃き川霧にぬれにたるかな

宵のまのことの亂れのさりけなく宇治の川波しづかなるかも

つきせざる情話に宇治の夜はふけて雁が啼きけり川霧のうへ

川霧にぬれしコートをぬぎすて、はじめて女笑めるなりけり

しかすがに心なごみて川霧のゆめのやうなる夜を寝ぬるかな

瀬の音のや、高まれば蘭燈のまた、きやまず夜はふけにつ、

夜あくるか、平等院の鐘の音のきりの中なるみづにひびける

こゝも身をおきやすからず、曉の霧にまぎれて遠く去なまし

宇治の夜はあくれど霧ははれやらず、千鳥の聲の遠方にする

霧の中、舟をいださせさすらひの旅を伏見へまづとりにけり

再 會

今生にまた逢ふこともあらじとぞ思へる人に逢ひにけるかも

再會はけに意外なりその人も見つめてしばし言葉なかりけり

面がはりせりとも見えすまなざしのすこし冷たくおもほゆるのみ

渡月橋さやけき川の瀬の音にきゝ入る人を見ておどろけり

うしろより聲かけられてつと眸を上げたる時のおどろきやうよ

今朝そゞろ小督の墓にとひよりてかへさといふも言葉ふるへぬ

死にもえすまたあひ見たる本意なさと胸の奥よりいでし聲はも

「ほとゝぎす」料亭の名もなつかしく君をさそひて入りにけるかな

久々に君につがれし幾杯の酒はなみだか酔ひがたきかも

酒の上これより丹波の龜岡に走らむといへばうなづきにけり

目の下の水は夕寒くながれけりあらしの山の黒ずむすがた

大正五年九月一日印刷
大正五年九月五日發行

(定價金五十五錢)

◀愛と然自▶

著 作 者

金 子 薰 園

發 行 者

佐 藤 義 亮

東京市牛込區矢來町三番地

發 行 所

新 潮 社

電話(番町)二、二二三番
振替(東京)一、七四二番

印 刷 所

東京市神田區宮本町五
番町下台五九〇八

(印刷者)

新 潮 社 印 刷 部

高 橋 治 一

歌人牧水の散文集出てたり

『自然と愛』と同型美本 ■初版忽ち賣切——再版出来

旅とふる郷

若山 著
牧水 著

▼特製美本
▼價五十五錢
▼送料六錢

□近時最も出色の好小品集 □文を學ぶ人の絶好師友

牧水氏は純情にして多感、常に滿眼の涙を以て歌ふ。その歌は既に定評の存する所であるが、南船北馬、幾山川を越ゆるの間、詩情茫然として胸に溢れ三十一字のリズムに餘れるを、散文の形に於て表白せるもの十數篇、こゝに集めて公にすることゝなつた。篇々、いづれも眞情の聲であつて、無韻の韻の却てひびき強きものゝあるを見よう。

附録 旅の歌 二百數十首

戀ふる子等かなしき旅に出づる日の船を
かこみて海鳥の啼く
白鳥はかなしからずや海の青空の青にも
染まらずたいよふ
山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき
春の國を旅ゆく

薰園氏の傑作全集

作者が第一の歌集『片われ月』より最近の『草の上』に亘り、作者自ら會心の作を抜くこと千二百首。これ我が歌壇一流の名家薰園氏の傑作全集と稱す可きものたり。歌に志ある人の絶好模範として薦む。

金子薰園集

金子 著
薰園 著

三版又々賣切第四版出来——特製極美本、定價六十錢、送料八錢

相馬御風氏曰く

此の歌集を手にして今更の如く吾々の感ずるところは、薰園氏が先づ第一に叙景詩と云ふ旗幟の下に、過去の永い歴史を有するわが國の短歌に向つての目ざましい革新運動を企て、金子氏等叙情詩を主とせる革新運動の一派と對立して、明治のわが短歌壇をして驚くべき清新な光彩あるものたらしめた功績の如何に偉大であつたかと云ふ一事である。隨て此の點に於て吾々は矢張最近公にされた「與謝野晶子集」の一巻と並んで、此の「金子薰園集」の一巻に對し、明治時代の短歌壇に於ける歴史的に意味深き記念出版としての敬意を表する次第である。(中略)「金子薰園集」一巻それに收められた一千餘首の短歌の藝術的評價を別にしても、此の一巻が新日本の生活そのものゝ上に及ぼした影響そのものだけでも實に偉大なものがある。吾々は此の一巻を手にして今更の如く往時追懐の情に堪へない。

—■集歌入繪■—

竹久夢二氏作
■三味線草

第五版 定價九十五錢
送料八錢

特製鉄入表装——夢二氏の新考案に
なり優雅麗麗の體裁也。
挿畫四十數葉——十數度の木版彩色
刷、及びコロタイプ版
本文百七十頁——新古の小唄より著
者會心のものを集む。

著者

自序 口この一卷を櫻さく三味線の國の娘達におくる。……
口あはれわが娘達よ。騎士のためならずば、ゆめく歌ふこと勿れ。

新作短歌百餘首、何れも夢二情緒の豊かなる作。新意に成
れる幾多の挿畫と待ちて、濃艶なる戀の幾情景を展開せり。

燦爛、目眩めくばかりの

「びろうど表紙、總金模様

初版再版 忽ち賣切 三版新たに出來 ▼定價九十五錢
▼郵送料八錢

竹久夢二作
Serenade
小夜曲

幹彦文粹

孔雀草

長田幹彦氏著

現代文壇の花形幹彦氏の豊麗の文を喜ぶ人の爲めに此の書を
編す。即ち著者第一の集たる『濛』及び『尼僧』『祇園夜話』等よ
り最近の『露草』『舞扇』『埋木』等に至る一切の著作に就き、
氏の特色を發揮せる妙所佳所を抜きて一卷となせるもの也。

■文を愛する若き人々の絶好師友■

祇園の春に戀の歡樂を追ふ著者と北海の冬に人生の命運に哭
する著者とを併せ示すものは此書にして、短幅の間に全面容
を知る可き『幹彦傑作抄』也。載する所百數十章、何れも文
藻富麗、聲調流麗、文を愛する人の三誦すべき佳品のみ也。

大定價十五錢 好評三版出來
送料六錢

■祇園歌集■

吉井勇氏著 □竹久夢二氏裝畫

■東京紅燈集■

第四版 五送吉井勇氏が、京は祇園島原、
十料戀の都に陶酔して、情熱の
五六湧くがまゝに歌ひたる三百
錢餘首。奔放、華麗、濃艶。

極美本 表紙、箱、共に
木版十數度刷

第二版 六送紅燈華かなる夜の東京の情
十料調を題材とせるもの。歌は
五六れたる東京情話にして又東
錢六京美人譜と云ふ可きもの也

竹久夢二 編裝 二畫
 情話新集 價四十四錢 送料六錢

- (一) 舞鶴心中 近松秋江 京都の某旅館の子息と其家の召使とが舞鶴の海に投げる事實物語。
- (二) 舞妓姿 長田幹彦 京の舞妓の戀を描ける傑作の集也。婀娜の姿、纏綿の情、艶麗の文。
- (三) 小さん金五郎 田村俊子 一死戀を全うせる小さんには誰か涙なからん。哀艶限りなきの物語。
- (四) 小夜ちどり 長田幹彦 全盛の名高かりし京の歌妓が半生多恨の哀史。作者泣血苦心の作也。
- (五) 戀ごころ 田山花袋 藝妓の戀を描けること本篇の如きは他に比倫なしと云はるゝ傑作。
- (六) お才と巳之介 谷崎潤一郎 美貌無比の小間使を中心として描ける興味縦横のロオマンズは是。
- (七) 箕輪心中 岡本綺堂 「君と寝やるか五千石とろか。何の五千石君と寝よ」凄艶且つ悲壯。
- (八) みだれ髪 小栗風葉 人美しくして戀は悲し。作者が戀の苦心に成れる新作の佳篇也。
- (九) お七吉三 田村俊子 附録に「お松彦三」あり。可憐の町娘が毒婦となる可き第一歩の悲劇。
- (十) 葛城太夫 近松秋江 祇園に全盛の太夫と青年畫家との戀の纏綿を描く。作者得意の題材。

代表的名作選集

| | | | | | |
|-----|--------|------------|--------|-------|------------|
| 第一 | 牛肉と馬鈴薯 | 國木田獨歩 | 第十二 | 今戸心中 | 廣津柳浪 |
| 第二 | 坊っちゃん | 夏目漱石 | 第十三 | 耽溺 | 岩野泡鳴 |
| 第三 | 蒲團 | 田山花袋 | 第十四 | 明治詩歌選 | 詩壇六家 |
| 第四 | 透谷選集 | 北村透谷 | 第十五 | 戀ざめ | 小栗風葉 |
| 第五 | 春 | (全二冊) 島崎藤村 | 第十六 | 別れた妻 | 近松秋江 |
| 第六 | わが袖の記 | 高山樗牛 | 第十七 | はつ姿 | 小杉天外 |
| 第七 | 爛れ | 徳田秋聲 | 第十八 | お艶殺し | 谷崎潤一郎 |
| 第九 | 平 | 凡二葉亭四迷 | 第十九 | 俳諧師 | 高濱虛子 |
| 第十 | 高野聖 | 泉鏡花 | 第二十 | 煤煙 | (全二冊) 森田草平 |
| 第十一 | 何處へ | 正宗白鳥 | 以下續々發行 | | |

鳥村抱月 生田長江 相馬御風 中澤臨川 共選
 特製極美本 一冊參拾五錢 送料四錢

7/2/50

著氏園薰子金

□師の歌□ □師の文□

■叙景文練習法 最新刊 定價三十五錢 送料六錢

■日記文練習法 第四版 定價三十五錢 送料六錢

■新書簡文(書簡) 二十四版 定價三十五錢 送料六錢

■書簡文捷徑 第十五版 定價三十五錢 送料六錢

■作歌新辭典 第六版 定價六十錢 送料六錢

■作歌練習法 第七版 定價三十五錢 送料六錢

■歌の作り方 第二版 定價四十八錢 送料六錢

『作歌練習法』は平易に作歌の實地研究法を説き、『歌の作り方』は初學者の士の爲に歌のいろはより教ふ。兩々相持つて作歌の秘奥を明かにす。

~~71~~
588

914.6
KAS3

終

